特279
34

大正十五年二月廿七日

住居問題參考資料

花井委員提出

始

特279-34

住所問題參考資料

目次

一　住所ノ意義
二　民法理由書ノ住所余ノ意見及ヒ內外諸家ノ學說說明
三　住所ニ關スル判例ノ補遺
四　山內氏戶籍法中ノ一節
五　荒川氏戶籍法中ノ一節
六　明治法制史戶籍ノ部
七　日本法制史戶籍ノ部
八　日本古代法大寶令里坊、民戶、戶籍ノ部
九　日本古代法戶婚律ノ部

十　支那法制ニ於ケル家ノ意義
十一　住ノ字ノ意義
十二　五人組制度

一　住所ノ意義（余ノ意見）

民法第二十一條ノ住所トハ各人生活ノ本據ナリ生活ノ本據トハ汝カ生活ノ中心ト爲シタル家ノ謂ナリ。家既ニ定マル、事アリ身或場所ニ轉スルモ、而モ長年月ニ渉ルコトアリトスルモ、家ヲ以テ生活ノ中心ト爲ス以上ハ家ノ在ル所住所ノアル所ナリ。家ヲ以テ生活ノ中心ト爲ス意思（主觀）ト其家カ客觀的ニ其人ノ生活ノ中心ナリト認メ得ラルル事實（客觀）ヲ充實セサルヘカラス。

内外諸家ノ學說

主觀說

中島博士――住ハ「ト、マル」ノ義ナリ人此世ニ在リテ止リ生活スル地ヲ住所ト云フ民法ハ之ヲ定義シテ本據ト云ヘリ

生活トハ無形ノ活動ヲ意味ス然ラハ卽主觀主義ニ屬シ人間ノ活動ノ中心點タル地ノ義ニ解シテ大過ナカルヘシ猶之ヲ形容スレハ恰モ圓ニ中心アルカ如ク人ノ社會上ノ活動ニモ自ラ中心點ア

リテ其地ヲ根據トシテ四方ニ活動ス其中心點タル地ヲ名ケテ住所ト謂フ

サビニー氏――　住所トハ任意ニ一箇ノ場所ヲ撰ヒ之ヲ常住ノ場所ト定メ總テ其法律上ノ關係及ヒ營業ノ中心ト爲ス場所ヲ云フ

タイゼー氏――　住所トハ人カ一定ノ地ニ留マラントスル意思ヲ繼續シ若クハ滯在ヲ繼續ストノ意思ニ基ク場所ヲ云フ

デバギエー氏――　住所トハ一定ノ場所ニ於テ商業ヲ營ミ若クハ工業ヲ爲シ或ハ其他ノ業務ヲ爲サンカ爲メ住居セル所ニシテ市町村ノ義務ヲ履行スル場所ヲ謂フ

客觀說

仁井田博士――　人ノ住所ノ發生スルニハ人カ或場所ニ平常居住スル事實アレハ足レリ故ニ人カ一定ノ場所ニ平常居住スル意思ヲ有スルコトハ其住所ノ發生ニ必要ナル條件ニ非ス

川名博士――　人ノ居住スル場所ニシテ唯特定ノ目的ノ爲メニノミニ居住スルニアラサル所ヲ意

味ス時ノ大部ヲ其場所ニ過ゴスコトヲ必要トセス又必スシモ獨立ノ住家ヲ有スルニ及ハス特定ノ目的ノ爲メニノミ居住スルトキハ其目的カ達セラルルニヨリテ當然其居住ヲ廢スヘキ傾向ヲ有ス

一、或生活上ノ目的ノ爲メニハ甲所カ住所トナリ他ノ生活上ノ目的ノ爲メニハ乙所カ住所トナルコトヲ認メス住所ハ全生活上ノ關係ニ於テ之ヲ定メ其本據ヲナス所ヲ以テ住所ト爲スカ故ナリ

一、住所ノ設定ハ一ニ其場所カ或人ノ生活ノ本據タルヤ否ヤノ事實ニ依リテ定マルノミ意思表示ニ依ルニアラス住所ノ廢止モ亦然リ法律上ノ意味アル行爲ニヨルニアラス

富井博士――　住所トハ法律上各人ノ常居ト認ムヘキ場所ヲ謂フ民法ニ於テ生活ノ本據ト定メタルハ必シモ定住ノ意思ヲ必要トスル主觀的標準ヲ取リタルモノニ非スシテ觀客的事實ノ認定ニ依ルヘキモノトスル趣意ナリ住所ハ生活ノ本據ナルカ故ニ必ス唯一ナルモノトス

寺尾博士――　吾人カ業務ノ中心卽チ利益ノ衝點タル場所ハ法律上吾人カ平常住居スヘキ所ナリ

平沼博士――　生活ノ本據トハ各人ノ生活ノ中心點トナル場所ヲ云フ

岡松博士――　住所トハ法律上ニ於ケル人ノ存在ノ位置ヲ云フ卽チ一定ノ人カ法律上ニ於テ常ニ存在スルト認メラル可キ場所ナリ

ヒリモール氏――　住所トハ格段ナル場所ニ居住シ永久滯留スル明確若クハ推定證據ヲ具備スル居所ヲ謂フ

折衷說

松岡博士――　任意ノ住所ハ常住ノ意思ト常住ノ事實トニ因リテ成立ス故ニ任意ノ住所ハ此二個ノ要件完備スルニ因リ設定セラルルコト亦疑ヲ容レス住所ヲ設定スル行爲ハ特別行爲ニシテ法律行爲ニ非ス

飯島學士――　住所トハ各人ノ生活ノ本據ヲ云フ或場所カ吾人ノ住所ナリヤ否ヤハ定住ノ意思ヲ以テ或場所ニ居住スル事實アリヤニ依リテ定マル從テ住所ノ廢止變更ニ付テハ定住ノ意思及ヒ繼續シタル居住ノ事實ノ二箇ノ條件ヲ要ス

嘉山博士――　住所ハ各人ノ生活ノ本據ニアリ住所ノ設定ニハ人カ一定ノ場所ニ居住シ之ヲ生活ノ本據トナスノ事實ト其場所ヲ生活ノ本據トナスノ意思卽チ住所意思トヲ具備スルコトヲ要ス

ワッテル氏――　住所トハ終始居留スル意思ヲ以テ一個ノ場所ニ居住スルヲ謂フ

バール氏――　住所トハ其者カ玆ニ居留シ以テ其生活ノ中心ト定メタル土地ヲ謂フ住所ノ成立スルニハ左ノ二個ノ條件ヲ具備セサル可ラス

一、或ル場所ニ引續キテ居留スル意思ヲ表示スルコトヲ要ス其意思表示ハ點示ナルモ可ナリ

二、其意思ヲ相當ノ行爲ニヨリ實行スルコトヲ要ス

ストリー氏――　住所トハ或人カ他ノ場所ニ移ルトノ意思ヲ有セズシテ現ニ在留スル場所ヲ謂フ

The idea of residence is also well brought out by Lord Loughborough:

"domicile is the place where a man would be, if there were no particular circumstance to determine his position at the moment to some other place."

ロード・ラウブラウノ定義

Domicile ハ若シ現ニ彼ノ住スル(場所)ヲ他ニ移スベキ特別ノ事情ナキ限リ彼ガ住セント欲スル其場所ナリ。

二　民法理由書

第二十一條　各人ノ生活ノ本據ヲ以テ其住所トス

(關)五〇四八四、法例八

一法制　住居ハ何處ニ在ルヤニ關シ或ハ(一)本籍ニ在リトシ(本籍主義——是レ舊法典ノ取ル所ナレトモ本籍ハ今日ニ於テハ有名無實タリ現ニ人二六六ニ於テ例外ヲ認ム)或ハ(二)居所ニ在リトシ(居所主義——之レ事實上ノ居所ト法律上ノ住所トヲ混同ス)或ハ(三)各人生活ノ本據ニ在リトス(本據主義)本法ハ佛法系及ヒ獨草ニ倣ヒ此主義ニ據ル。

二〔生活ノ本據〕　有形無形ノ利益ノ中心ヲ云フ。然レトモ住所ノ設定移轉アルニハ一定ノ地ニ居住スルノ事實ト之ヲ以テ生活ノ本據ト爲スノ意思アルコトヲ要ス。故ニ一旦住所ノ設定アリタルトキ則チ一地ヲ以テ生活ノ本據ト爲ストキハ住所ヲ更ユルノ意思ナクシテ之ヲ去リ又ハ其意志アルモ之ヲ去ラサルトキハ住所ハ廢止セラルヽコトナシ

三無住所及數住所　住所ノ廢止ハ新ナル設定ニ伴フ然レトモ從來ノ住所ヲ廢止シテ新ニ之ヲ設定セサルコトヲ得ルヤ英佛法系ハ之ヲ認メス前住所繼續スルモノトス獨法系ハ住所ナキコトヲ認ム(獨民訴一八、同草一七、3項)而シテ本法ハ住所ヲ有セサル者アルコトヲ認メタリ(二三)蓋シ生活ノ本據ヲ以テ住所ト爲ス以上ハ其本據ヲ定メサルモノアル可ク而シテ尙ホ前住所繼續スルモノトスルノ擬制ヲ設クルノ要ナキヲ以テナリ。一人ニシテ數住所ヲ有スルコトヲ得ル、

カ(一)佛法系ハ之ヲ許サス(二)英法系ハ本住所ハ一箇ノ外ハ之ヲ許サス然レトモ商業上住所政治上住所等ヲ認ム(三)獨法系ハ之ヲ許ス(普總二七、索二七、獨二草一七2項)本法ハ之ヲ認メス蓋已ニ生活ノ本據ヲ以テ住所ト爲ス以上ハ生活ノ中心ハ必ス一地ニ歸スヘキヲ以テナリ。

三　住所ニ關スル判例

「民法第二十四條ニ於ケル假住所ノ規定ハ民事訴訟法上ノ假住所ニ適用スヘキモノナリ(明治卅五年二卷一二四頁)

「或地方カ或人ノ住所ナリヤハ其地ヲ以テ生活ノ本據ト爲ス意思ト其意思ノ實現卽チ其地ニ常住スル事實ノ存スルヤ否ヤニ依リ決スヘキモノニシテ如何ナル狀況ノ存スレハ斯ル意思アリ事實アリト認メラルヘキカハ事實問題ニシテ固ヨリ一定ノ具體的標準アルニ非ス(大正九年七月二三日一一五七頁)

「(名古屋控訴院)住所ノ設定又ハ拋棄ハ單ニ意思ノミヲ以テ足ルモノニアラスシテ其意思ノ實現

ヲ要スルモノニシテ住所意思ノ實現ニハ少クトモ身ノ居クヘキ一定ノ場所ノ存在ヲ必要トシ其場所ナクンハ住所アリト謂フヲ得サルモノトス(大正十年六月一日民事部判決)

「(函館控訴院)衆議院議員選擧法ニ於ケル住所ノ意義ニ付テハ何等明定スル所ナキカ故ニ民法第二一條ニ定ムル如ク選擧人ノ生活ノ本據ヲ爲ス特定場所ヲ指稱スルモノト解スヘキモノトス(大正九年七月二二日判決)

「(函館控訴院)通例住所トシテ特定場所ノ表示ヲ爲スニ當リテハ最小行政區劃ノ外ニ尙ホ町名又ハ字及ヒ番地ヲ以テスルヲ多シトスレトモ住所ノ表示方法ニ付テハ一般的規準ナキヲ以テ其表示ノ程度精粗ニ關シテハ各場合ニ於テ之ヲ要求スル法令ノ內容ヲ參酌シテ決定スルヲ要スルモノトス(大正九年七月二二日同上)

「(同控訴院)明治三四年內務省令第二九號衆議院議員選擧人名簿ノ樣式ニ依レハ同名簿住所欄ニハ何郡(市)何町村ト記載スヘキ旨記載アリ又衆議院議員選擧法第一八條第四項ニ住所ノ記載ヲ

要ストセルハ主トシテ場所的要件ノミヲ明ニスル爲メナリト解スヘキヲ以テ選擧人名簿ノ住所ノ表示トシテハ單ニ選擧人ノ住所地タル最小行政區劃ノ地域ヲ記載スルヲ以テ足ルモノト謂ハサルヘカラス（大正九年七月二二日同上）

「（長岡區）住所ハ各人生活ノ本據ニシテ住所寄留居出ハ其事實ヲ居出シムルモノナレトモ居出アリタル事ヲ以テ其場所カ居出人ノ住所ナリト斷スルヲ得ス要ハ現ニ其場所ヲ以テ生活ノ本據トナスヤ否ヤニ依リ決セラルヘキモノトス（大正六年六月廿九日判決）

「（行政裁）町村制第六條ノ住所トハ民法第二一條ノ定ムル住所ノ謂ニシテ各人ノ事實上ニ於ケル生活ノ本據ナルヲ以テ寄留ニ關スル居出ノ如キ形式上ノ手續ト相關スルモノニ非ス（大正九年十月一日判決）（大正十一年十月二日同趣旨）

「（法曹會）小學校教員カ乙村ニ常住シ同村ニ職ヲ奉シ甲村ニ於テ財産ヲ所有シテ其收益ヲ生活資料ノ一部ト爲セルトキト雖モ其者ノ住所ハ乙村ニ在ルモノトス（七卷民法七六〇頁）

大審院―― 當事者カ或場所ヲ以テ住所ナリトシテ自己ノ所有家屋ナルコト及自己ノ本籍アルコトヲ立證シタルトキハ他ニ何等事情ナキトキハ其場所ヲ以テ住所ト見ルヘキハ當然ナリ（明治卅八年一月二三日判決）

大阪控訴―― 生活ノ本據ト爲スノ意思ヲ以テ現住スルノ事實アレハ住所ト認定スルヲ相當トス

行政裁―― 從來町村內ニ住所ヲ有スル者ハ其妻子カ他縣ニ移住シ自己ハ單身合宿所ニ寄宿シタリトノ事實ノミヲ以テ從來ノ住所ヲ他ニ移シタルモノト認ムルコトヲ得ス（大正二年十月二日）

行政裁―― 公務ニ從事スルモノハ勤務地ニ居住スルノ義務ヲ有スルニヨリ反證ナキ限リ勤務地ヲ生活ノ本據地ト認メサルヲ得ス諸種ノ寄附ヲ爲シタルコト恩給ヲ受取リタルコト納稅ヲ爲シタルコト家族ヲ居住セシメタルコト等ノ事實ハ必スシモ生活ノ本據ヲ定ムル標準トハ爲スニ足ラス（大正二年二五三號）

行政裁―― 住所ノ移動ニ付テハ現實ニ新ナル住居ヲ以テ生活ノ本據ト爲シタル客觀的事實ノ存

在スルヲ以テ足リ從來ノ住所ニ再歸セサル意思ヲ必要トセス（大正六年三月六日）

行政裁――　其地ニ戸ヲ構フルノ事實アリテ兩親竝ニ子供ヲ爰ニ殘シ置キ常ニ送金シテ之ヲ扶養シ近隣ノ交際ヲ怠ラサル事實存スルトキハ良シヤ外國ニ出稼シ且ツ各所ニ遍歷シタルコト數年ニ及ヒタリトスルモ之ヲ以テ其地ニ於ケル住所ヲ失ヒタルモノト論スルヲ得ス（大正十三年四月一日）

同上――　住所ハ生活ノ中心ナルヲ以テ之ヲ構成センニハ住居者カ特ニ或ル地點ヲ以テ生活ノ中心地トナスノ意思ヲ以テ現ニ其地ニ住居ノ實ヲ擧クルコトヲ要ス故ニ單ニ現住ノ事實カ長キニ渉ルノ故ヲ以テ住所ヲ獲得スルモノニアラス又既存ノ住所ニ於テ一時居住ノ中斷アル故ヲ以テ直ニ住所ヲ撤廢シタリト云フヘカラス（同上）

札幌地方――　分家ノ戸主ニシテ本家ヨリ獨立シ或ハ耕作ノ目的ヲ以テ一戸ヲ構ヘ其場所ニ於テ營業鑑札ヲ受クルカ如キハ已ニ其ノ場所ヲ以テ生活ノ本據トスルノ意思ヲ以テ居住スルモノト認ムルヲ相當トス（大正五年四月三日）

大審院――　生活ノ本據ト爲スノ意思ヲ以テ現住スルノ事實アレハ住所ト認定スルヲ相當トス（明治四一年三月六日）

外國判例――　住所ノ變更ハ主タル設備ノ現實的移轉アルヲ必要トス從テ當事者カ當初定メタル住所ヲ其儘ニ置キ他市ニ至リ僅ニ家族僕婢同棲スルニ至ル丈ケノ室ヲ賃借シタル事實ノミニテハ假令正式ノ屆出ヲナシテモ住所ノ變更ナリト云フヲ得ス（法新一〇二號二〇頁青木博士判例集）

四　戸籍（山内博士戸籍法中ノ一節）

戸籍法ハ戸籍ニ關スル法則ニシテ戸籍トハ戸口卽チ家屬ノ關係ヲ明ニスル記錄タリ。抑モ戸籍ノ制ハ古ヨリ存シ殊ニ戸令ノ定ムル所ニ至リテ其旨義簡明周到ヲ極メタリ。蓋シ明治四年布告戸籍法則ノ規定スル所實ニ其根義ノ戸令ノ成則ニ採リタルモノノ如シ。今戸令ノ一節ヲ揭ケンニ曰ク

凡戸籍六年一造起十一月上旬依式勘造里別爲卷惣寫三通其縫皆注其國其郡其里其年籍五月

卅日内訖、二通申送大政官、一通留國、所項紙筆等調度、皆出當戸、國司勘量所項多少、臨時斟酌、不得侵損百姓、其籍至官、竝卽先納後勘、若有增減隱沒不同、隨狀下推、國承錯失、卽於省籍具注事由、國亦注帳籍、云々

ト卽チ右ノ制ニ依レハ戸籍ハ戸口調査ノ目的ノ爲メニ造リタル帳簿ニシテ毎六年ヲ期トシテ之ヲ改メ造リ以テ大政官ニ申送セリ明治四年布告戸籍法則ニ依ルニ其冒頭ニ立法ノ根義ヲ明ニセリ曰ク

戸數人員ヲ詳ニシテ猥ナラサラシムルハ政務ノ最モ先シ重スル所也夫レ全國人民ノ保護ハ大政ノ本務ナルコト素ヨリ云フヲ待タス然ルニ其保護スヘキ人民ヲ詳ニセス何ヲ以テ其保護スヘキコトヲ施スヲ得ンヤ是レ政府戸籍ヲ詳ニセサルヘカラサル儀ナリ又人民ノ各安康ヲ得テ其生ヲ遂ル所以ノモノハ政府保護ノ庇蔭ニヨラサルハナシ去レハ其籍ヲ逃レ其數ニ漏ルルモノハ其保護ヲ受ケサル理ニテ自ラ國民ノ外タルニ近シ此レ人民戸籍ヲ納メサルヲ得サルノ儀ナリ中古以來各方民治趣ヲ異ニセシヨリ僅カニ東西ヲ隔ツレハ忽チ情態ヲ殊ニシ聊カ遠近アレハ卽チ志行ヲ同フセス隨テ戸籍ノ法モ終ニ錯雜ノ弊ヲ免レス或ハ此籍ヲ逃レ或ハ彼籍ヲ欺キ去就心ニ任セ往來規ニ依ラス沿襲ノ習人々自ラ度外ニ附スルニ至ル故ニ今般全國總體ノ戸籍法ヲ定メラルルヲ以テ普ク上下ノ通義ヲ辨ヘ宜シク粗略ノコトナカルヘシ

ト尙ホ同布告第四則ニ曰ク

戸長其區内ノ戸籍ヲ式ノ如ク之ヲ集メ二通ヲ清書シ(中略)其集ル所ノ籍ハ戸長ニ備ヘ置キ清書二通リト共ニ其支配所ニ差出スヘシ支配所之ヲ其廳ニ差出シ其廳之ヲ(中略)戸籍一通ハ其廳ニ備置キ一通ニ廳印ヲ押シ表ト共ニ六年目ニ大政官ヘ差出スヘシ

ト何ソ大寶令ノ成則ト相似タル蓋シ之ニ依リテ觀ルモ古來戸籍ハ戸口行政ノ目的ヲ以テ時期ヲ定メテ之ヲ作リ來リタルハ明ナリ。其後戸籍ニ關スル事項ニ付キ屆出方ヲ規定シ尋テ明治十九年ニ至リ内務省令第十九號ニ依リ諸屆出方ヲ改メ出産、死亡、失踪者復歸、廢戸主廢嫡改名復姓身分交換

其他戸籍ニ關スル事項ニ付キ屆出義務及屆出期間ヲ定メ科料ノ制裁ヲ附シテ其屆出ヲ强制シ更ニ同年同省令第二十二號ヲ以テ戸籍取扱手續ヲ定メ戸籍簿ノ調製及其登記ノ方式ヲ定メ且其戸籍ハ時期ヲ定メテ之ヲ改製スルコトナク永ク之ヲ保存シ新ナル入籍除籍其他屆出事項ヲ之ニ登記スヘキモノト爲スニ至リ制度ニ幾分ノ變遷アルモ戸籍ハ常ニ戸口行政ノ目的ニ出テタル記錄タルヲ知ルヘク卽チ明治四年布告戸籍法則ノ趣旨ハ終始一貫曾テ易ハル所アラサリシハ明ナリ然ルニ明治三十一年民法ノ實施ト共ニ舊戸籍法制定セラレ一面舊來ノ戸籍ノ制ヲ定ムルト共ニ一面身分登記ノ事ヲ規定シ戸籍法ニ一大變革ヲ來スニ至レリ凡ソ身分登記トハ人ノ身分ニ關スル事項ヲ屆出ニ因リテ身分登記簿ニ登記スルヲ謂ヒ其登記ノ目的ハ身分ニ關スル事項ヲ一般公衆ニ公示スルニ在リテ戸口調査ノ行政上ノ目的ヲ有スル舊戸籍ト異ナリ而カモ戸籍法ニ依リ身分登記ヲ爲スヘキ事項ニシテ人ノ氏名族稱ニ關スル事項ノ如キ又ハ國籍ニ關スル事項ノ如キハ民法ノ規定スル所ニ非スト雖モ身分登記ノ主タル目的ハ民法ニ定メタル親族相續ニ關スル事項其他身分ニ關スル事項ニシテ卽チ主トシテ民法上ノ身分事項ニ關スルヲ以テ戸籍法ハ民法ノ附屬法ト稱スルコトヲ得ヘシ。唯民法ノ規定ニ依レハ人ノ身分ハ必スシモ之ヲ身分登記簿ニ登記スヘキニ非ス其戸籍吏ニ屆出ツヘキコトヲ規定シタル事項ニ付テモ其事項ハ屆出ニ因リテ直チニ效力ヲ生スヘキコトヲ規定シタルカ故ニ之ヲ登記スルト否トハ身分事項ニ何等ノ影響ヲ及ホスモノニ非ス。故ニ戸籍法中身分登記ニ關スルコトハ民法上ノ問題ニ非スシテ純然タル戸籍法上ノ問題タリ卽チ戸籍法ニ於テ人ノ身分ニ關スル事項ハ屆出ニ依リテ登記スヘキモノト爲シタル趣旨ハ蓋シ人ノ身分ヲ公簿ニ依リテ明ニスル公益上ノ必要ニ出テタルモノニシテ之ニ依リテ以テ人ノ身分ヲ公簿ニ記錄シ之ヲ永遠ニ持存シ之ヲ一般ニ公示シ且之ニ依リテ戸籍編製ノ基本ヲ作ルニ在ルノミ。故ニ此意義ヨリ論スレハ戸籍法ヲ以テ純然タル民法ノ助法又ハ補充法ト謂フハ當ラス。

五　戸籍（荒川氏戸籍法ノ一節）

戸籍法の沿革

戸籍法は一家の組織、存廢及ひ人の身分の得喪、變更等を明らかにするものにして我か日本帝國の支配を受くる臣民の實態を示す必要なる法律なり。殊に家族制度の我國に於ては、戸籍は特殊の性質を有して、祖先を崇ひ家名を重んする國民道德の大本にも關係し極めて大切なるものにして。之れか淵源に溯つて其由て來る所を濕ぬれば其發端は極めて遠きものあるか如し。即ち崇神天皇の即位十二年(紀元五百七十五年)全國に詔して、人民の戸口を校り、以て男女の調役を課せらる。是は調役即ち課稅の爲なれとも而も戸口調査の濫觴は實に玆にあり。後恭允天皇即位四年(紀元一千七十六年)詔して姓氏の混亂を正し、彼の探湯の法を行はしめ、姓氏を定め、其籍を作らしめらるに至り、戸籍の制度漸く其緒に着き、降つて孝德天皇即位元年(紀元一千三百五年)隋唐の制に倣ひ氏族制度を改め新に戸籍を作り。又田數を校り、班田租庸調の法を設けられるるに及んて。戸籍制度は、課稅法と共に稍々其步を進めたり。所謂大化の革新是れなり。文武天皇即位の大寶元年彼の有名なる大寶律令を布かるるに及んて戸籍の制度も漸く其體を爲すに至れり。

然るに其後保元平治の戰亂を經て鎌倉時代となり、更に足利氏衰へ群雄割居所謂戰國時代となり、庶般の制度と共に廢絕に歸したりしか、德川氏立つに及ひ『御定め書百箇條』を令し、或は人別の制を設け、以て人民の生死を調え、出入を明にし、以て大に其手續を密にせり。而も是には宗門改めの制を加へ、外敎禁止の政略にも用ひたるものあるへしと雖も、其主とする所は全く戸口調査の目的に外ならすして實に德川幕府三百年の戸籍制度は是れなり。明治維新の後、民部省をして人口戸數の調査を掌らしめ、明治四年四月四日に至り、始めて全國に施行すへき戸籍法則三十三箇條を設け區劃制定、戸籍編制戸長設置、戸籍官吏、其他戸籍の加除、送入籍の方法等に至る迄悉く之を規定し以て戸籍制度の新紀元を開けり。

當時該法則發布の布告文に曰く、「戸籍人員ヲ詳ニンテ猥ナラサラシムルハ、政務ノ最モ先シ重スル所ナリ、夫レ自國人民ノ保護ハ大政ノ本務ナルコト素ヨリ云フヲ俟タス、然ルニ其保護スヘキ人民ヲ詳ニセス何ヲ以テ保護スヘキ事ヲ施スヲ得ンヤ是政府戸籍ヲ詳ニセサルヘカラサル儀ナリ」と是

人民保護の要件として戸數人員を詳にすべき旨を示すに止まれとも、而も當時維新の庶政、纔に其緒に就きしに止まり。所在に脱籍浮浪の徒少からず、較もすれは、新政の妨害を爲さんとする者ありしを以て。戸籍制度の方法に因り戸口調査と同時に此等浮浪の取締を爲すも、蓋し亦一目的たりしを疑はさるなり。而して『此度編成ノ法、臣民一般住居ノ地ニ就テ之ヲ收メ』云々と規定したるは、人民一定の住所を公認し、國民、屬地籍の制を定め以て行政上國民の屬籍を明にせるものなり。爾來我が國の文明は長足の進歩を爲し、時勢の急變すると共に戸籍法則も漸次其趣旨を擴張するの必要を生し、明治八年太政官第二百九號を以て『婚姻又ハ養子養女取組若シクハ其離婚、離縁、假令ヒ相對熟談ノ上タリトモ雙方ノ戸籍ニ登記セサル内ハ其效ナキモノト看做ス』旨を定め以て身分登記の制を加ふるに至り。明治十九年内務省令第十九號を以て出生死亡、出入等の屆方、及ひ寄留者屆出方を定め同年十月同省令第二十二號を以て、更に戸籍取扱手續を一定したる等大に其内容の改正と共に其事務も次第に發達して遂に民法の制定に伴ひ戸籍法も之を整頓するの必要を生し。第十二議會に至り。民法親族相續諸編と共に戸籍法を議會に提出通過して、明治三十一年法律第十二號を以て公布せられ、戸籍の法制大に備はりしのみならず。從來内務行政の所管事務たりしを移して司法行政の事務に更めたるは、根本的の一大變革といふへし。

然るに當時之れか法案制定の任に當れる法典調査會の人々を始めとし、世間に歐米個人主義の思想彌漫せしかは爲に各個人身分上の權利を重んずるに過くると同時に我か國古來の美風たる家族制度を輕視し、特に身分登記簿なるものに力を用ひ隨つて、身分登記簿と戸籍簿と、其記載上重複して多く無用の手數と煩累とを餘儀なくするに至り、遂に今回の改正を要することとなれり

六　戸籍（清浦奎吾著明治法制史二三四頁以下）

維新以前ニ在リテ平民ノ戸籍登錄事務ハ宗敎上ノ關係ヨリ之ヲ寺院ニ司ラシメ。武士ノ戸籍ハ藩廳ニ於テ取扱ヒタリ。而シテ當時各藩ハ一小國ノ態ヲ有セシカ故ニ其藩籍ヲ脫シテ他藩ノ籍ニ入ルニハ許可ヲ要シタリ。維新後モ暫ク舊制ニ由リ寺院ヲシテ戸籍事務ヲ取扱ハシメシカ明治四年

四月布告ヲ以テ戸籍法ヲ制定シ別ニ吏員ヲ置キテ其ノ事務ヲ司ラシメ翌年之ヲ地方下級行政廳ニ移シタリ。此ノ戸籍法ハ當初ハ戸籍事項ノ外現今警察統計等ニ屬スル種々ノ事項ヲ含ミシカ此等ハ漸々削除セラレ戸籍ニ關スル部分モ屢々修正セラレタリ。今其ノ要點ヲ擧クレハ各人ノ住所ハ土地又ハ家屋ニ據リテ番號ヲ付シ出生、死亡、失踪、親族及ヒ家族關係ニ於ケル身分ノ變更等ヲ其都度屆出テシム。此ノ點ニ付キテハ明治十九年九月內務省令第十九號ヲ以テ更ニ各事項ニ付キテ屆出ツヘキ期間及ヒ屆出ツヘキ責任者ヲ定メ屆出ヲ怠ルトキハ一定ノ科料ニ處スルコト、セリ。又一管區ヨリ他ニ其ノ住所ヲ轉シ本籍ヲ移スニハ當初ノ規定ニ依レハ地方廳ニ出願シテ戸籍ニ關スル證狀ヲ得之ヲ新住所ノ下級行政廳ニ差出シテ其ノ籍ニ編入ヲ請フコト、セシカ其ノ後ノ修正ニ由リ轉籍スルニハ只退籍入籍ノ屆出ヲ以テ足レリトシ送籍ノ手續ハ直接ニ退籍地ノ下級行政廳ヨリ入籍地ノ下級行政廳ニ對シテ爲スコト、セリ。住所ヲ轉スルモ必スシモ本籍ヲ轉スルコトヲ要セス。現住所ノ寄留籍ニ編入スルコトヲ得。蓋シ近時ノ法律ハ現實ノ住所ニ據リテ法律關係ヲ定ムル

コト多シト雖モ現行法中尙ホ種々ノ點ニ於テ本籍地ニ據リ法律關係ヲ定ムルモノアリ。下級行政廳ハ一定ノ體裁ヲ有スル戸籍簿ヲ具ヘテ屆出事項ヲ登錄シ其副本ハ上級廳ニ納メ置キ正本滅失ノ際ハ之ニ基キテ新ニ調製スルモノトス戸籍簿ヲ改製セントスルトキハ上級官廳ノ許可ヲ要シ調製ノ上ハ檢査ヲ受クルコトヲ要スト規定シタリ

民法(親族編、相續編)ヲ施行スルニ付テハ從前ノ戸籍法令ニ依リ難キモノ多ク且ツ補足ヲ要スル點少カラサルヲ以テ明治三十一年六月法律第十二號ヲ以テ戸籍法ヲ改定シ同年七月十六日ヨリ實施セラレタリ。本法ニ依レハ戸籍及ヒ身分登記ニ關スル事務ハ戸籍吏(市町村長、區ヲ置キタル市ニ於テハ區長)之ヲ管掌シ戸籍役場(町村役場又ハ市區役所)ニ於テ之ヲ取扱フ。戸籍事務ハ戸籍役場ヲ管轄スル區裁判所ノ一人ノ判事又ハ監督判事之ヲ監督ス。戸籍吏カ其職務ノ執行ニ付屆出人其ノ他ノ者ニ損害ヲ加ヘタルトキハ其ノ損害カ戸籍吏ノ故意又ハ重大ナル過失ニ因リテ生シタル場合ニ限リ之ヲ賠償スル責ニ任ス。身分登記又ハ戸籍ニ關スル事務ニ付戸籍吏ノ處分ヲ不當トス

ル者ハ管轄區裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ト定メタル等ハ新ニ加ヘラレタル條項ノ著シキモノナリ。本法ハ九章二百二十三條ヨリ成立スルモノニシテ戸籍吏及ヒ戸籍役場、身分登記簿登記手續、身分ニ關スル屆出、戸籍簿戸籍ノ記載手續、戸籍ニ關スル屆出抗告、罰則ニ付詳細ニ規定セラレタリ。

七　戸籍（池邊義象著日本法制史ニ因ル）

上代ノ戸籍

一、族制政治時代

階級制嚴ニシテ部長ハ部民ヲ率ヰテ事ニ從ヒシカバモトヨリ後ニ言フ如キ戸籍法ナシ

崇神天皇十二年ノ詔ニ

海外既歸化宜當此時更校人民令知長幼之次第及課役之先後焉（日本紀）

トアルニ徴シテ更校ニ人民ヲノ事アリタルハ明ナリ

顯宗紀ニ「創除籍帳隸山部連」

欽明紀ニ「安置國郡編貫戸籍」トアルヲ以テ當時既ニ戸籍法ノ設アリシヲ知ル

二、戸籍法ヲ定ム

孝德天皇大化ノ初メ戸籍法ヲ定メラレ東國ノ國司等ヲ拜シ、詔シテ云ハク「汝等任ニ之キ皆戸籍ヲ作リ及ビ田畝ヲ校セヨ」ト

斯クテ白雉三年四月ノ條ニ「是月造戸籍」ト見ユ、是レ唐制ヲ斟酌シテ造ラレシ戸籍法ノ始メナリ

三、庚午年籍

天智天皇九年ニ至リ更ニ戸籍ヲ作ル

史ニ「造戸籍斷盜賊與浮浪」トアリ

斯ノ如クシテ戸籍ハ調製セラレ、大寶ニ至リテ益〻整ヒタリ

大寶令ノ戸籍法

一、造籍ノ次第及保存

戸籍ヲ造ルニハ、戸主(即家長)其戸内ノ口數ヲ記シタルヲ京師ハ坊長、ソノ他ハ鄕長ニテ取集メテ郡司ニ出ス。郡司之ヲ纒メテ國司ニ出ス

國司式ニヨリテ勘造シ五十戸毎ニ一卷トナス。總テ三通ヲ寫シ皆其國其郡其里其年籍ト記シ毎年十一月上旬ニ起リテ明年五月卅日迄ニ訖リ二通ハ太政官ニ申送シ一通ハ國ニ留ム

斯クテ六年毎ニ造リ其古キモノハ三十年間留メ置キテ後日勘檢ノ用ニ供ス

戸籍法ノ敗頽及近世戸籍法

一、莊園大ニ起リ不課ノ戸多クナリテハ戸籍ノ法愈紊レ、遂ニ鎌倉幕府創立トナリテハ武士各私兵ヲ養ヒ兵農全ク分レテ戸籍ノ法考フヘカラス

二、德川氏ノ初モ戸籍法ヲ設ケテ一般ニ行ハシムルニ非ス、必要ニ應シテ名主等ノ私ニ人別帳ヲ製シ置クカ如クナリキ

1. 寛永ノ末、島原亂後、耶蘇教禁止ノ令一層嚴重ニナリ宗門改トイフコト始マリテ戸籍法ヲ嚴シクスルコトヽナレリ

2. 吉宗ノ改革

吉宗、荻生徂徠ニ戸籍法改革ノ議ヲ徵ス享保六年六月ニ令ヲ下シテ先ヅ人數ヲ注進セシメタリ

斯クテ同十一年ニ至リ諸國ノ總人數ヲ郡別ニ記進セシメ、且ツ同時ニ爾後ハ子ノ年ト午ノ年トニ必ス戸口ヲ檢覈シテ注進セシムル制ヲ立ツ當時ノ人別帳卽チ戸籍ハ王制ノ古ノ如ク一定ノ式ノ下ニ官ニテ調製スルモノニ非スシテ名主ニ一任シ又宗門改寺請證文ハ寺院ニテ調製スルモノナレハ、自ラ其間ニ弊ヲ生シ且ツ其體裁モ互ニ異同アリテ治世上不都合アリシカハ吉宗之ヲ改革セント試ミタルナリ、然レトモ多年ノ習慣遂ニ壞ルコト能ハスシテ止ミタリ

抑モ戸籍調製ノ目的ハ、今更ニ新ラシク述フルニ及ハサレトモ德川時代ニハ其始メ耶蘇教ヲ禁

スル爲ノ必要ヨリ起リタルモノナレハ後ニ至リテ寺請證文ノ弊アルヲ知ルモ除クコト能ハス。斯クテ後ハ宗門人別改帳ト人別帳トハ別ニスルコトヽナリ宗門人別改帳ハ毎年宗門改奉行ノ許ニ差出シ人別帳卽普通ノ戸籍ハ名主ノ許ニ置クコトヽナリシモ嚴格ナル式法ノ下ニ於テ調製スルコトハ遂ニ行ヒ得サリシナリ

八　大寶令（有賀博士日本古代法釋義九七頁以下）

里坊

京内ニ於テハ一戸ノ地ヲ長サ十丈廣サ五丈トス。八戸ヲ一行（長四十丈廣十丈）トシ。四行（卅二戸）ヲ一町トシ。四町（百二十戸）ヲ一保（方二町）トシ。四保（十六町百十二戸）ヲ一坊（方四町）トシ。四坊（十六保六百四十四戸）ヲ一條トス。（長サ十六町廣サ四町）是古ノ市制ナリ一坊ニ長一人ヲ置キ四方（一條）ニ令一人ヲ置キ。戸口ヲ檢校シ奸非ヲ督察シ。賦徭催駈セシム。坊令ニハ正八位以下ノ明廉强直ニシテ時務ニ堪フル者ヲ取ル。坊長ハ之ヲ白丁（無位平民）ノ才幹アル者ニ取ル。地方ニ於イテハ郡ノ下ニ里アリ以テ最下層ノ行政區劃トス。五十戸ヲ一里トシ六十戸ニ滿ツレバ十戸ヲ割キテ別ニ一里ヲ立ツ。里毎ニ里長一人ヲ置キ戸口ヲ檢校シ農桑ヲ課殖シ非違ヲ禁察シ賦役ヲ催駈セシム里丁ハ白丁ノ清正强幹ナル者ニ取ル。

民戸　一戸ハ卽チ一家ニシテ親族ノ團結ナリ。其口數固ヨリ定限アルコトナシ。戸主ハ皆家長ヲ以テス。家長トハ正嫡相承クル者ヲ云フ。戸内ニ伯叔アリトモ傍親トシテ戸主タラシメズ。前戸主亡スレバ嫡子立ツ。嫡子ナケレバ嫡孫立ツ。卽チ長子相續ナリ。兄弟同籍ニシテ兄死スレハ兄ノ子立ツ。然ルトキハ弟ハ卽チ戸主ノ叔父ニシテ傍親ナリ。

凡ソ男女三歲以下ヲ黄ト爲シ。十六歲以下ヲ少ト爲シ。廿歲以下ヲ中ト爲シ男ハ廿一歲以上ヲ丁ト爲シ。六十一歲以上ヲ老ト爲シ。六十六歲以上ヲ耆ト爲シ。夫ナキ者ヲ寡妻妾ト爲ス。

戸内ノ口ヲ析出シテ別ニ戸ヲ爲スハ中男以上トス。成中男ニ非サルモノ及ヒ寡妻妾ハ戸主ニ堪フヘキ力有ルニ非サレハ分ツコトヲ聽サス。戸内ノ男皆死シテ自ラ女戸主ト爲レルハ格別ナリ。未ダ

戸籍ニ附カザル者始メテ新ニ貫ニ附クニハ必ス保證ヲ取リ其ノ元由ヲ問糺シ逃亡詐冒ニ非サルコトヲ知リ而シテ後ニ聽ス。若父母各〻別國ニシテ其子兩處ニテ貫ニ附ケル者ハ父ノ國ニ從テ定メヲ爲ス。然シナカラ大宰府ノ部内竝關所アル諸國（三越陸奥石城石脊等）ハ人口多キヲ可トスルヲ以テ見住ニ從ヒテ定メヲ爲ス。狹郷（人口多ク生活困難ナル地方）ニ居ル者寛郷（人口少ナク生活寛裕ナル地方）ニ遷リ就カント願フハ本郡ニ申牒シテ國司ノ處分ヲ請フ。國境ヲ出テ、他國ニ還ラント請フハ官（大政官）ニ申シテ報ヲ待チ閑月（十月一日ヨリ二月卅日ニ至ル間ヲ閑月トス農事閑隙アル月ナリ）ニ於テ之ヲ領送シ附領シ訖リテ兩所ノ國郡ヨリ各〻官ニ申ス

外蕃ニ抄略セラレ或ハ風波ニ遭ヒテ流落セシ者還リ來ルコトヲ得タルトキ。又ハ外人歸化スルトキハ所在ノ國郡ニ於テ先ツ衣糧ヲ給シ飛驛ヲ發シテ具狀進奏シ。沒落人ハ舊貫ニ復ス。舊貫ナケレハ其ノ欲スルニ任セテ近親中ノ貫ニ附ス。歸化人ハ寛國ニ於イテ貫ニ附ケ安置ス。竝ニ粮ヲ給シ遞送シテ以テ其ノ居ルヘキ所ニ達セシム。

戸、或ハ戸内ノ口（戸籍ノ中ノ一人）ノ浮浪シ或ハ逃亡シテ三周六年ノ限ヲ過キテ既ニ名籍ヲ除キタル者及ヒ家人奴婢ノ放タレテ良ト成リ若クハ良ナルヲ訴ヘテ免ル、コトヲ得タル者ハ竝ニ其ノ所在ニ於テ貫ニ附ス。保證ヲ取ルコトハ新附戸ノ方法ニ同シ。若シ本屬ニ還リ附カント欲セハ亦之ヲ聽ス。

戸籍　戸籍ハ六年ニ一タビ之ヲ造ル。十一月上旬ヨリ起メテ翌年五月三十日内ニ訖ル。里別ニ一卷トシ其ノ縫（ウハ）每ニ皆某ノ國某ノ郡某ノ里某ノ年籍ト注ス。總ヘテ三通ヲ寫シ二通ヲ太政官ニ申送シ一通ハ京若クハ其ノ國ニ留ム。雜戸陵戸ノ籍ハ更ニ一通ヲ寫シテ各〻其本司ニ送ル。太政官ニ申送スルハ各〻當國ノ貢調使ニ附シ太宰府ハ貢綿使ニ附ス。若シ恩復水旱等ニ因リテ調使京ニ入ラサルトキハ專使ニテ之ヲ申送ス。造籍ニ用ウル所ノ紙ハ黃蘗ニ染メテ堅厚ナラシム。但シ西海道諸國ハ白紙ニ書ス。其ノ紙筆、墨、軸、帙、帶等ノ費用ハ皆當戸ヨリ出ス。（當時籍帳ノ樣式ハ東大寺正倉院ニ傳存セル大寶二年以下ノ戸籍ノ斷簡數通アリ以テ其ノ大略ヲ知ルニ足ルト云フ）戸籍ノ外每年兩京及ヒ各國ニ於テ課口（調庸ノ義務アル者）ノ年齡ヲ記載シタル臺帳ヲ作ル之ヲ計帳ト云フ。戸籍計帳ヲ造ル時ニ當リテ年ヲ計フルニ丁ニ入リ老ニ入リ疾ニ入ル者アリ。之

ニ因リテ課役ヲ徵シ少ノ中男ニ入リ中男ノ丁ニ入ル者課役ヲ免シ丁ノ老ニ入リ老ノ者ニ入リ及ヒ殘疾癈疾ニ入ル者侍ヲ給スヘキ者ハ皆國司親シク其ノ形狀ヲ貌以テ簿ヲ定ム。之ヲ貌定ト云フ。一タヒ定メタル後ハ更ニ貌ル可カラス。若シ奸欺ノ疑アルトキハ事ニ從ヒテ臨時ニ之ヲ貌定シテ籍ニ附ス。

京師及諸國ヨリ戸籍ヲ大政官ニ申送スレハ先ツ之ヲ中務、民部ニ納メ民部ニ於イテ之ヲ勘檢ス。若年紀ヲ增減シ或ハ籍ヲ脫シテ上セス或ハ生ヲ詐リテ死ト注セル類先籍ト同シカラサルコトアレハ狀ニ隨ヒテ本國ニ下推シ國ノ失錯ナレハ省ノ戸籍計帳ニ具サニ失錯ノ事由ヲ注ス。五位以上ノ子孫ハ籍帳ニ各〻父祖ノ位名ヲ載ス故ニ本貫ノ貢送ニ任セテ更ニ勘籍セス。

戸籍ハ恒ニ五比六年ヲ一比トス即チ三十年間ノ籍ヲ留メテ以テ勘檢ノ用ニ供シ其遠年ノ籍ハ次ニ隨ヒテ之ヲ除ク之ヲ五比籍ト云フ。但シ天智天皇ノ九年ニ作リタル庚午年籍ハ後世ニ對スル氏姓ノ標準トシテ永ク除ク例ニアラス

九　戸婚律（有賀博士日本古代法釋義二四六頁以下）

祖父母父母在而子孫別籍　凡ソ「祖父母父母在シテ而シテ子孫籍ヲ別ケ財ヲ異ニスル者ハ徒二年若祖父母父母別籍セシメ及ビ子孫ヲ以テ妄ニ人後ヲ繼ク者ハ徒一年。子孫ハ坐セズ（法曹至要抄戸令集解）

釋ニ曰ハク「女子ヲシテ夫ニ從ヒテ別籍セシムル者ハ禁ゼズ」ト

按スルニ祖父母父母ノ權力ヲ以テスルモ尙子孫ヲシテ別籍セシムルコトヲ得ザリシナリ。思フニ是家族ヲ保全スル主義ヨリ起レルコトナラン。其ノ財ヲ分ツニ至リテハ祖父母父母ノ權力ヲ以テセバ則チ反法ニ非ザリキ。法曹至要抄ニ曰ハク「說者云フ已ニ異ニシタル後ハ悔還スベカラズ」ト

養異姓男「凡ソ異姓ノ男ヲ養フ者ハ徒一年。與フル者ハ笞五十。其ノ遺棄ノ小兒ハ年三歲以下ナレハ異姓ト雖モ收養シテ卽チ其ノ姓ニ從フヲ聽ス」（法曹至要抄文保記）

男子ヲ養ヒテ子トスルハ必ス族類ニ求ムベキコトハ令ニ規定シタリ。唯三歲以下ノ棄子ノミ他

姓タリトモ養フコトヲ聽スナリ。姓ト云フハ支那ニ在リテ本邦ニナキモノナレバ茲ニハ氏族

即チ苗字ノ義ニ解スル外ナシ。

相冐合レ戸「凡ソ相冐シテ戸ヲ合スル者ハ徒二年。無課役ハ二等ヲ減ズ。缺字戸ヲ合スベクシテ合スルコトヲ聽サザル者ハ主司缺字一百。」戸令集解。戸令御抄

十　支那法制ニ於ケル家ノ意義（廣池博士東洋法制史本論一五四頁以下）

家トハ家族ノ意義ニシテ建物ノ家ヲ指スニアラス。サレド其所謂家ハ初メ建物ノ家ヨリ起リシモノニシテ。後世ニ至リテハ家ヲ又一ニ門ト云ヒ。戸ト云ヒ。房ト云フナド種々ノ名稱ヲ生スルニ至レリ。

家ノ字ハ說文解字七下ノ段註本五左ニ

家尻也从レ宀豭省聲

トアリ。尻ハ居ノ字ノ古體ニシテ。宀ハ說文ノ家ノ字ノ前ニ象形ナリトアリテ家屋ノ形ヲ象リテ造

リシ文字ナル事ヲ云ヒ。段氏ハ其字形ノ生セシ理由ヲ說明シテ古者屋四柱ナレハナリト云ヘリ。次ノ豭省聲トアルニ對シテハ是ヲ以テ說文ノ著者許愼ノ誤ト爲シ而シテ自說ヲ主張シテ

窃謂此篆本義乃豕之尻也引伸假借以爲人之尻字義之轉移多如此牢牛尻也引伸爲所以拘罪之陛牢庸有異乎云々

ト云ヘリ。學者異說ナキニアラザレド皇清經解所收經述三ノ十右通訓定聲豫部三十四左等段氏ノ此說蓋シ肯綮ヲ得タルカ如シ

サテ此造字ノ起原ヨリ其用法ノ沿革ニ至ルマテ之ヲ通考スルニ(一)造字ノ起原ハ前記ノ如クニ豕ノ小屋ニシテ(二)次ニ人ノ居ヲ家ト云ヒ（左傳五十七ノ二十六左哀公四年ニ公孫翩逐而射之入於家人而卒トアル家人ヲ疏ニ凡人之家ト云ヘリ卽チ今日所謂人家ノ義ト見ユ）(三)又其次ニ人ノ住屋ノ奥ヲ家ト云ヒ（爾雅五ノ一右釋宮ニ牖戶之間謂之扆（扆ハ疏ニヨレハ屏風ノ類）其內謂之家トアリ。毛詩十六ノ二ノ十七右緜ニ古公亶父陶復陶穴未有家室トアリテ傳ニ古公處圜狄人

侵之(中略)去之踰梁山邑乎岐山之下幽人曰仁人之君不可失也從之如歸市陶其土而復之陶其壤而穴之室內曰家云々トアリ。疏(二十一右)ニ室內ヲ家トイフコト更ニ說明アリ)(四)

又其次ニ一轉シテ家トハ夫妻相伴フモノヲ云フ事ト爲リシモノノ如シ。(毛詩一ノ四ノ十四右行露鄭註ノ夫家ノ疏ニ我豈不欲與汝爲室家乎云々ト云ヒ十五ノ右ニ周禮十四ノ廿二右地官媒氏ノ無夫家者トアル文ノ解ニ就キテ是男無家女無夫男女相對男稱夫女稱家以男女所以成家周禮云夫家之衆寡是也ト見ユ又周禮十一ノ五左小司徒之職ノ鄭玄ノ註ニモ有夫有婦然後爲家トモアリ)

是ニ於テ家トハ有形ノ建物ヨリ一ノ無形人格ノ稱ト爲リ。隨テ家族ノ意義ト爲ルニ至レルモノナルヲ知ル。(尙ホ此他注意スヘキ事ハ公羊傳六ノ十六右莊公四年ノ條ニ諸侯ヲ國ト云ヒ大夫ヲ家ト云ヒ國ハ百世ノ孫ニテモ其遠祖ノ讎ヲ報スヘシ家ハ然ラザル事ニ見ユ此他此事尙書禮記ニモ見ユ

十一　住ノ字ノ意義

住

すむ　居所を定めて居る、又すまひ

止む　中止する　李白詩　兩岸猿聲啼不住

とどまる(留)　去の對

立つ

居る

住屋　住宅に同じ

住家　すまひ　住宅

住所　すまひ　住處

住宅　すみか　すまひ　住家

住邸　住宅に同じ　邸はやしき

（字　源）

十二　五人組制度

本邦に於て五保の制有るは大化の改新に百般の制度皆範を支那に採りて革新を行ひたる後に屬す。

「日本書紀」孝德天皇白雉三年四月の條に曰く、

是月造二戸籍一。凡五十戸爲レ里、每里長一人。凡戸主皆以二家長一爲レ之。凡戸皆五家相保、一人爲レ長、以相檢察。

之を本邦五保制度の初見となす。蓋し亦唐制に倣ひて之を設けたるものなり。然れとも五保制度の完備せしは此後大寶、養老の律令の制定せらるゝに及ひてよりの事なるか如し。

五人組は「戸令」に所謂五家相保の制なるを以て、個人團体に非すして民戸團体なり。故に其組合員

終